東日本大震災から十年

まけないぞうを つくり続けて

作り手さんからのお手紙

N・Sさん

あの日から一〇年

今でも忘れられない瞬間です。

地震のあと、友達の叫び声で家を飛び出し、後を振り向いたら我が家が渦にまかれて流される信じがたい光景でした。友達の声が聞こえなかったら今の私がないと思うとぞっとします。その夜は行き場がなく地区の人達と一晩野宿しました。その時の寒さと夜の長さ、星のかがやきは今も脳裏に焼きついています。私達の地区は七〇戸近くありましたが、全戸が壊滅、流出状態でした。

それから、避難生活では日本全国、世界各国からのたくさんの暖かいご支援を頂き、心から感謝しております。

その中で、今も続けて頂いているのが「まけないぞうさん」です。友達にもすすめて一緒にやっています。増島さんをはじめ、スタッフの皆様方にはほんとうに感謝です。私達の作ったもので世界の多くの方々に笑顔が届けられたら私達も幸せです。復興も物的には終わりに近づきつつありますが、今はコロナ禍で行動も制限されているような状態です。一日も早くコロナが収束して交流ができることを願っています。

神戸の震災の時は遠方での出来事の感じでしたが、今はどこにいても地球規模での災害の起こり得る状況です。これからは常に防災を意識して生活をしていかなければと思います。

▲仮設住宅でのまけないぞうづくり

U・Sさん

いまはただだいきているだけだけです。失ったものをあえて取り戻したいとは思わない。

当時は、ボランティアの人たちも一生懸命してくれたから、被災したから何もしなくていいのではなく、できることをしたいと思った。被災したから縮こまっているのではなく、やれることはやろうと思っただけです。

つるしびなやいろんなことをやる機会を作ってもらって自分の好きなことができてよかった。津波の前よりも活発に動いてこれた年のわりには物事に世間並みについていきたいと思ってやってきた。

▲わかめ、採れたぞう！

▼みんなでたこ焼きパーティー

▲出来ましたまけないぞう！

Aさん

今年であの恐ろしい悲劇から一〇年経ちます。また、まけないぞうに出会ってからも一〇年になります。思い出したくもない悲劇な光景ですが、忘れることも出来ません。被災して家を失ったことも悲劇ですが、それ以上に祖母を亡くしたこと、避難所での生活が生きていく上でものすごく過酷な毎日でした。同じ子をもつ五世帯が一つ教室に同じ部屋での生活は、目に見える嫉妬、差別、いじめともとれる行動。

毎日、くやしくて泣きくずれ、私にしかわからない。

この思いは言葉にしてうまく伝えることができません。

ただ、言えるのは、その立場から逃げることもできずに、耐えることしかできない毎日、今生きている自分がとてもくやまれてならなかった。そのくらい辛かったとしか…。

物資は皆にいきわたることもなく、人の豹変、こんな人だったんだと本性をむき出しにして。皆、必死になっているのが、見えて恐ろしかったです。

そんな孤独の中、一人のおばちゃんが「ぞうさん作ってみない」と大勢がいる体育館に呼ばれ、そこでおばちゃん達数人とぞうさん作りを教わり、ワイワイガヤガヤと私はそこで笑っている自分に何か月かぶりにこんな笑っただろう。楽しいと心からそう思いました。

▲避難所でのまけないぞうづくり

そこでぞうさんが仕事になると聞き、「やりたいです！！」とすぐに言ったような気がします。

そこから、一人で作っている時は、周りのママたちが気にならなくなり、日中は体育館に行き、おばちゃんたちと会話しながら笑うことができ、避難所での後半は楽しく過ごすことができました。

私は美容師です。一八年にしてやっと自分の店を開店させ、子どもを育てながら、夢を実現させることができたのですが、津波ですべて無くし、仕事もなく内職して、できるものは次から次へとなんでも引き受け仮設に入ってからも仕事をしていましたが、でもどれもこれも途中でなくなったり、音信不通になったり、その中でもぞうさんは、いつも仕事を持って来てくれ、私の作ったぞうさんが世界中に届いていること、いろんな人が買ってくれていること、やっぱりうれしいです。

作り甲斐があります。それに増島んさんやらいろんな方たちが材料を持ってきながら、いろんな話をして、笑ったり時には相談にのってくれたり。今は家を建て、パートですけど仕事をすることもでき（美容師ではなく、別の職種ですけどね）時間の合間にぞうさん作っています。

もう、一〇年なんだぁ～と今でもあの日の事は夢に見ることがあります。被災者になってからすべてがいい事だらけでもなく、家を建てるまでいろいろ苦労もありました。被災者に安心して家を、暮らしができる土地を、とうたっていながら、問題だらけの土地を預けられ、町と戦ったり、もうへとへとですよ。そんな時も増島さんやいろんな人たちが助けてくれました。もう町にはかないませんよ…。

大震災の次はコロナという目に見えないウィルスにおびえながら暮らす世の中になってしまい、家

▲いまはなき桜（大槌町赤浜地区。現在高台の造成により伐採されてしまいました。）

から出ることもできず、早く終息することを願わずにはいられません。

まけないぞうは私に笑顔をくれました。これからもまけないぞうが続く限り、私は作りますよ。まけないぞうに出会えたことに感謝！

あ・り・が・と・うぉぉぉ！！

▲遠野にて

Tさん

二〇一一年三月一一日、一四時四六分。

当時私達が住んでいた岩手県釜石市に震度6弱、マグニチュード九・〇という大地震が起きた。

私は、釜石市の隣町、上閉伊郡大槌町で仕事をしていた。会社は海からさほど遠くない所にあった。

地鳴りがあったかなかったか記憶はない。

携帯の警告音が鳴ったと同時に、今まで聞いたことのない、言葉では言い表せないほどの音とともに、下から突き上げる揺れに襲われた。

何が何だか分からず、すごい揺れの中、急いで机の下へ。その時、会社内に一人でいたため、ただただ恐怖の中にいたのを覚えている。どれくらいの時間揺れていたのか。すごく長く感じた。もぐっていた机が潰れたため、揺れが少し弱くなったすきに急いでトイレへ駆け込んだ。

ドアが開かなくなると逃げられなくなると思い、ドアノブを掴み隙間を開けたまま、またすぐに来た大きな揺れをやり過ごした。

▲三陸津波記念碑

恐怖の中頭に浮かんだこと。〈必ず津波が来る！〉
小さい頃から海のそばで暮らしてきたため、【地震が来たら津波が来る】と教わってきた。
〈家に帰んなきゃ〉〈子供たち迎えに行かなきゃ〉二回目の大きな揺れがおさまるあたりに急いで車に走った。
心臓の音が指先まで伝わっているのを感じるくらい、恐怖でハンドルを握った手の震えが止まらなかった。とにかく急いで車を出した。
パニックにはなっていたが、頭は変に冷静で一瞬で色々考えた。
車を走らせながら、まずは学校に行っている子供二人の事。
時計を見ると、いつもなら下校の時間になっている。子供たちの学校へ向かうべきかどうか？
歩いている生徒を一人でも見かけたら、下校した後ということで、子供たちは登下校する道のどこかにいるはずだからその道へ向かおう。
生徒の姿は見当たらない。これはみんな学校に残っている！下校前だったんだ。
学校にいるなら全員で避難しているはず！と確信を持った。
すぐ母に電話したがすでに通じなかった。
家には一歳の息子と、私の母がいた。父が仕事から帰っている時間ではあったが、もし帰っていなかったら目の見えない母と一歳の息子だけ。
学校の子供たちを信じ、まず家へ向かった。
家に着き、玄関のカギを開け父と母を大声で呼んだ。返事なし。父の車はある。
〈避難したんだ！〉

私はヒールから玄関にあったスニーカーに履き替え、カギをかけて指定されていた避難所へ走った。父・母・息子の姿はない。
何人か避難していたが、そこは高台ではない場所。避難していた人たちに、「ここにいたらダメだよ！高台に避難しなきゃ！絶対に津波が来る！！私は恋の峠に行くよ！」と伝えて、また走り出した。
私たち家族は、地震が来た時の避難場所を【家から一番近い峠の頂上にしよう】と話し合っていたので、ためらわずそこへ全速力で走った。
峠の頂上に、父・母・母におぶられた息子がいた。三人の顔を見て一安心したのも束の間、学校の子供たちはどうなっているのだろう。姿が見えない不安と焦りで心臓が爆発しそうになっている。
子供たちの学校は、海からわずか七〇〇ｍの所にあったので、避難訓練の時は津波からの避難も想定し行われていた。毎回学校から八〇〇ｍも離れた避難場所まで全校生徒で走る訓練をしていた。
私たちが避難した峠は、学校の指定された避難場所へ繋がる道がある。
〈子供たちは走っているはず！〉〈全員で走っているはず！〉たくさんの恐怖の中、信じた。
何度も大きな余震で揺れる。地震発生からどれくらいの時間がたったのだろう。
峠から見えていた町の景色が変わる。防潮堤を海の水が恐ろしい速さで乗り越えてきたのだ。私の目の前で何が起こっているのか理解できない。
防潮堤を乗り越えた黒い水は、ものすごい音と速さで建物を破壊しながら町を飲み込んでいく。家という家の姿が目の前から消えて行く。
『津波だーーーーーーーーーーー！！！！』
誰も想定していなかっただろう規模の大津波だった。町が消えて行く。
「子供たちはどうなっている？」「私たち助からないかもしれない、死ぬかもしれない」と考えていた。
波が海とは反対側の山に、水しぶきを上げてぶつかっている光景を見ながら、体の震えが止まらなかった。〈これは現実なの？〉夢を見ているのかと思った。
その時、悲鳴とともに一生懸命に峠を駆け上がってくる子供たちの姿が見えた。〈生きていた！！！！！！〉子供たちの後ろまで津波は迫っている。みんな必死に走っていた。頂上まで着いた子たちに順に「大丈夫？」「大丈夫？」と声をかけた。

▲軽自動車が学校の校舎へ突っ込んでしまった
（釜石市立鵜住居小学校：海抜 2m）

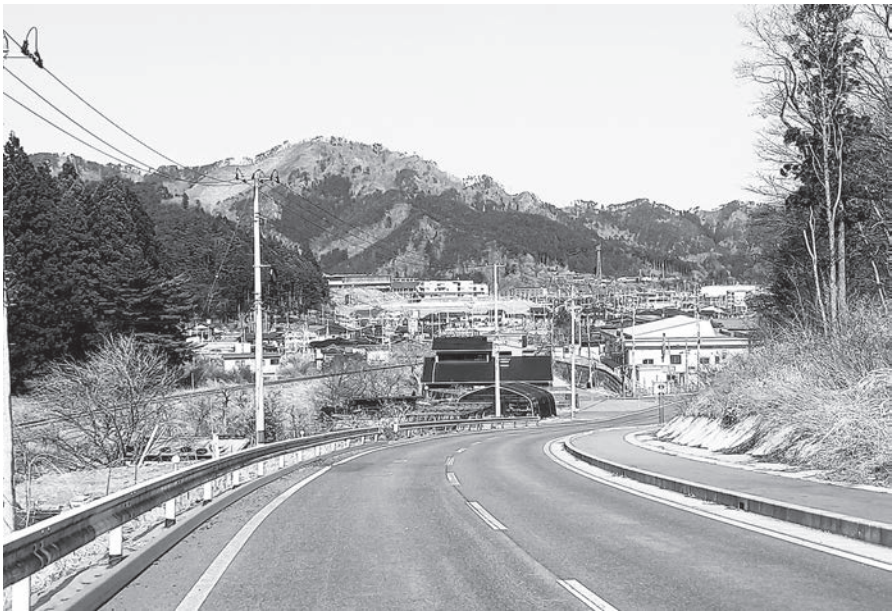
声をかけながら我が子を探した。子供たちでいっぱいになっていく峠。その中に長女が見えた。学校からの長い距離を無我夢中で走ってきたんだろう。三月の釜石はとても寒い。防寒着は着ていなかった。足元を見ると上履き。〈走りにくかっただろうに・・・〉長女は、「ママー!」と駆け寄った。こわばっている顔。

当時小学三年生だった長女は、堰を切ったように泣き出した。

「怖かったよね、本当に頑張った。ここまでよく走って来てくれたね。」

さっきまでとは違う感情で体が震える。長女の確認はできた。私はすぐに、当時小学一年生だった長男を探す。探しても見つからない。近くにいる子供たちに聞きながら探した。みんな「わからない。」と言う。先生を見つけて「一年生はどこですか?」と聞いた。先生は「途中まで後ろを走っていたのですが。すみません。わからないです。」と言った。頭が真っ白になる。先生も必死に走ってきたんだろう。〈先生がわからないということは、ここに居ないということは。津波に巻き込まれたのか・・・〉

〈どうしよう。死んだかもしれない〉頭がおかしくなりそうだった。体の震えが増して、立っているのがやっとの状態だった。少しすると、最後の方に上がってきた人が、一年生は走っている途中道の脇へそれたよと教えてくれた。



▲峠道（この峠道を子どもたちは走って逃げた）

同じクラスに子供がいるお母さんと私の父と一緒に、探しに行くことにした。顔を見るまで、生きているのか・・・信じられない。

自分の命よりも大切な子供を、大切な命を失うかもしれないという恐怖。今までに感じたことのない恐怖だった。

峠を下っていると、坂を上がってくる子供たちの姿の中に長男が見えた。

〈生きてたーーーーーーーーーーーーーー!!!!!!〉

子供たちの通っていた小学校には、隣接して中学校があった。後に聞いた話だと、避難時、中学校の生徒が先に走り始め、その後を小学校の生徒が走った。学校から八〇〇m離れた指定された避難所へ着いたが、今までにない地震の大きさに「ここではダメだ!もっと高台へ避難した方がいい。」という話になったらしく、そこから更に五〇〇m程坂を上った所にある老人ホームへ向かうことになる。

中学生が小学生を励まし、声掛けしながら手を引き走ってくれた。〈自分たちも恐怖でいっぱいだっただろうに・・・〉

集団の最後の方を走っていた体力のない一年生はこのまま道をまっすぐ走っていたら間に合わない、津波はすぐ後ろまで迫っていたため、走っていた道のすぐ脇の、山を切り崩した高台へ登るという事になった。山を切り崩しただけの所だったため、足場は悪く垂直に近い角度の崩れやすい土を踏みしめながら上の方まで上がったらしい。そこへ登る時も中学生が小学生を下から押し上げたり、上から引っ張ってくれた。そこにいた子供たちは全員助かった。自分たちもどうなるかわからない

▲恋の峠（学校から 1600m。子どもたちが避難した峠。海抜 44m）

中、自分たちよりも小さい子供たちを支えてくれた。当時伝えられなかった思いを今ここで伝えたいです。

《今でも感謝しています。本当にありがとう。》

色々な形でその日は家族に会えなかった人、その日だけではなく、何日間か会えず別々の場所で連絡も取れない不安の中過ごした人もいる。

私たち家族は運命的に同じ場所へ避難したため、地震が起こったその日離れ離れになることはなかった。その運命に感謝したし、とても幸せなことであったと思う。

私たちは一〇年前の三月一一日、一日にしてそれまで送っていた普通の日常生活を失った。住んでいた家・乗っていた車・着ていた服や履いていた靴・毎日遊んでいたゲーム機・いつも一緒に寝ていたお人形やぬいぐるみ・子供たちの成長を撮りためたビデオテープ・思い出がいっぱいの写真・など、失った物もたくさんあった。子供たちの成長を撮っていたビデオテープや写真がなくなったことがとても悲しく辛かった。でも、何よりも大切な命があった。思い出は自分の中にある、いつでも思い出せる。生きていて良かったと心から思う。

その命を守るために、震災天災が起こった時、自分に何ができるのか、どのように行動できるのかを想定しておくことは大切だと思う。そして、普段から

▲釜石市立鵜住居小学校（津波当時：海抜 2m）

▼釜石市立釜石東中学校（津波当時：海抜 2m）

何かあった時の連絡の取り方や避難場所を家族で話し合っておくことが大切だと思う。

▲多くの犠牲者を出した鵜住居地区防災センター

▼釜石祈りのパーク（防災センター跡地）

私たちの分岐点だった一〇年前。簡単には言葉で言い表せない一〇年間の道のり。震災を経験した人、支援ボランティア活動をしている方たち、自衛隊の方たち、色々な形で支援して下さった方たち、遠い場所から励まし、心配し、支えてくれた家族。それぞれの思いがあっての一〇年間だと思う。そして、たくさんの人の愛に出会った一〇年間でもある。私たちは、そのたくさんの愛に感謝しています。

《心からありがとうございます。》

震災を経験してきた私たちだけではなく、一〇年前、日本中、地球上でそれぞれの形でその時を見つめ、一緒に歩んできたみんな。

きっと私たちにとって、東日本大震災は一〇年前に起こった事という過去のものではなく、今もこれからも一緒に生き続けて行くものなのだと思う。

H・Sさん

もう一〇年、短いような、長いような…。もう一〇年って言っていいのか。夢中で走ってきたような感じがする。昔はこの集落に山を隔てて六〇軒ほどあったけど、いまは同じところに三十六軒ほどいる。

これからどのくらい人生生きられるかわからないけど、いまのうちにしたいことといっぱいしたい。子どもにも面倒かけたくないし。あっちこっち行きたいわけでないけど、この静かな生活をちょっとでも長く生きていけるようにしたい。

震災前のご近所といまは全然ちがう。昔はお隣といっても一〇mくらい離れていて、いまは家同士がくっついているから、窮屈で気を使う。同じ部落の人もいるけど、隣の部落からも来た人もいるし、同じ部落の人でも気を使うのよ。

▲震災前の桜（根浜地区）

それで、いまは山を開墾して畑に行くことが唯一の息抜きで、楽しみなの。やっぱり気を使っていてね。顔色伺ったり、気を使うのよ。「やっぱり元には戻らない」。

冬の時期はとくに、やることがなくて、みんな暇で時間を持て余しているの。たまには、声かけてお茶飲みとかするけど、昔のように気兼ねなく話すことはできないのよ。昔だったら、お友達やおばちゃんなどと、気兼ねなく、相談したり、悩みを話せたけど、いま無理。みんな津波後別の場所に引っ越ししてしまったから。寒くて仕事がない時はそんな親しいい人たちと話しをして時間を過ごしたけれど、今は〈親しいふり〉をしているの。

今の楽しみは家庭菜園して、庭いじりしたり、たまに来る孫と遊ぶことくらいかな。

たまに、一人暮らしのお年寄りの人が、道端でひなたぼっこしている。きっとみんな同じように寂しい想いをしているんだと思うよ。

いまの生活を維持していかなくちゃならないから、新たに人と付き合っていかないきゃならない、みんな我慢したり、寂しい想いをしていると思う。だから、無理にでも仲良くして、何事もないようにこの静かな穏やかな生活をしていきたいと思ってる。

▲家庭菜園の様子

▼工事が進められる

二〇一一年三月一一日東日本大震災から一〇年の月日が経過しました。壊滅的な被災地を前に言葉を失った日をいまも鮮明に覚えています。あの壊滅的な被災地から何とか生き延びてきた被災者の人たちと避難所でまけないぞう作りを始めました。その輪はどんどん広がり、「まけないぞうのせいで、店から白い糸がなくなったよ。」と言われるほどの人気ぶりでした。現在も作り続けてくれている作り手さんたちから一〇年間の想いを込めてお手紙をもらいました。これまでたくさんのご支援を頂いたみなさんに心からの感謝の気持ちを込めて、作り手さんからのお手紙をお届けします。

二〇二一年三月一一日

被災地ＮＧＯ協働センター　まけないぞう担当　増島智子

東日本大震災から 10 年
まけないぞうからをつくり続けて　作り手さんからのお手紙

編集・発行
被災地 NGO 協働センター
〒 652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通２－１－１０
TEL：078-574-0701 FAX：078-574-0702
E-mail：info@ngo-kyodo.org